

日本基督教団 富士見町教会

イースター・オルガン演奏会 演奏：白井真奈



パイプオルガンのご紹介

初設置：1999年12月

設計・製作・組立：

Werner Bosch Orgelbau GmbH

整音・調律：Michael Bosch

ディスポジション：秋元道雄

鍵盤：3段手鍵盤と足鍵盤

ストップ数：45



2023年4月15日(土) 14:00開演 13:30開場

(入場無料・自由献金)

会場 富士見町教会 大礼拝堂

演奏：臼井真奈氏 プロフィール：国立音楽大学楽理科卒業後、フランクフルト音楽大学オルガン科でエドガー・クラップ氏に師事。同学卒業時にオルガニスト・ディプロマを取得。ピアノをマイヤー・ヘルマン氏、チェンバロ、通奏低音をグレゴール・ホルマン氏に師事した。



京都およびドイツ・カッセル市を拠点に、バロック、ロマン派から現代までの幅広いレパートリーを持つコンサートオルガニスト、チェンバリストとして活躍。ヨーロッパ各国で開催される国際オルガン音楽祭でのリサイタル、オーケストラや合唱団との共演などで多彩な演奏活動を展開している。2010年にはゲルリッツ市・ペーター教会の「太陽のオルガン」

を、2011年、2013年、2017年には南仏アンブルン大聖堂の歴史的オルガンを、いずれも修復以来、初めて日本人オルガニストとして招待されて演奏し、好評を博した。

2021年の「カッセルのミュージックターゲ2021」では、マーティン教会において20世紀最大の作曲家、O.メシアン晩年の大作「聖体秘跡の書」の全曲演奏しに挑み、その深い楽曲解釈と卓越した技巧が高く評価された。

CD「こどものためのオルガンリサイタル」、「バッハオルガン曲集」の他「光と風のディアローグ」は「レコード芸術」特選盤に選ばれた。昨年には最新CD「ブラームス・オルガン全曲集」をリリース。日本オルガニスト協会会員。

富士見町教会のご紹介

1886年植村正久により創立されました。日本基督教団に属するプロテスタントのキリスト教会です。

■主任牧師：藤盛勇紀 ■牧師：星野江理香

■牧師：小宮一文

礼拝のご案内

日曜日 朝礼拝 午前10時20分-12時

夕礼拝 午後6時-7時

火曜日 昼礼拝 12時30分-12時55分

教会学校 礼拝 日曜日 午前9時～

キリスト教入門講座

日曜日 午前9時-10時 水曜日 午後6時30分-8時

祈禱会・聖書研究会 木曜日 午後6時30分-7時30分

富士見町教会 イースター・オルガン演奏会 プログラム

- J. S. バッハ トッカータ、アダージョとフーガ ハ長調 BWV 564
Johann Sebastian Bach (1685-1750) Toccata, Adagio und Fuge C-Dur BWV 564
- J. ブラームス 11のコラール前奏曲」op. 122 より「わが心の切なる願い」
Johannes Brahms (1833-1897) „Herzlich tut mich verlangen“ aus „Elf Choralvorspiele“
- S. カルクニエラート 66のコラール即興曲集 op. 65 より「愛するイエスよ 何をなして」
Sigfrid Karg-Elert, (1877-1933) „Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen“
- J. S. バッハ オルガン小曲集より aus „Orgelbuchlein“
- | | | |
|----------------------|-------------------------------------|--------|
| 「おお人よ、汝の罪を嘆け」 | „O Mensch, beweine dein Sünde groß“ | BWV622 |
| 「キリストは死の縄目につながれたまいし」 | „Christ lag in Todesbanden“ | BWV625 |
| 「聖なるキリストはよみがえりたまえり」 | „Erstanden ist der heilige Christ“ | BWV628 |
| 「この日神の子は勝利をおさめたもう」 | „Heut' triumphieret Gottes Sohn“ | BWV630 |

～ 皆様と一緒にうたいましょ～

- H. ゲブハルト Hans Gebhard (1929-2022) 「天の座にいます」
„Gelobt sei Gott im höchsten Thron“ aus „Sieben neue Choralvorspiele“
讃美歌21-322 「天の座にいます」 第1, 2, 3 節

休憩

- G. フィッシャー Gottfried Fischer (1924-2009)
音楽的な戯れ - 「心を外に向け、喜びを見つけなさい」 もしモーツァルトがコラールを作曲したなら
Ein musikalischer Scherz über „Geh aus, mein Herz, und suche Freud“ (nach Wolfgang Amadeus Mozart) (1989)
- M. レーガー ～生誕150年を記念して～ 12の小品集より「ベネディクトゥス」op.59-9
Max Reger (1873-1916) Benedictus op.59-9 aus „12 Orgelstücke“
- O. メシアン オルガンの書より「鳥の歌」
Olivier Messiaen (1908-1992) Chants d'oiseaux du Livre d'orgue
- J. S. バッハ (H.メセレー編曲) シャコンヌ(無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番ニ短調 BWV1004より)
Chaconne aus der Violin-Partita d-moll BWV 1004, für Orgel bearbeitet von Henri Messerer (1873-1923)

J. S. バッハ: トッカータ、アダージョとフーガ ハ長調 BWV 564

情感溢れるアダージョ、躍動感に満ちたフーガと続くこの華麗な作品は、ヴァイマル時代(1708-1717)のバッハの、熱心なイタリア音楽研究の成果と言えるでしょう。冒頭の駆け巡るような速さのパッセージや31小節に及ぶペダルソロから、「オルガンの名手」として鳴らした若き日のバッハの卓越したテクニックがしのばれます。

J. ブラームス: 11のコラール前奏曲 op.122 より「われ心よりこがれ望む」

バッハを深く尊敬したブラームスは、その厳格な対位法を踏まえつつ、独自の手法で新しい効果を生み出そうとしました。1896年、死の前年に書かれたこの曲集は、同年春、クララ・シューマンの訃報を聞いた後で書かれました。バス声部の8分音符による鼓動が、美しくも悲しい16分音符の上声部を支え、コラール旋律がペダルでゆっくりと奏されます。

S. カルクニエラート: 66のコラール即興曲集 op.65より「敬愛するイエスよ、何をなされて」

ドイツ後期ロマン派を代表するカルクニエラートは、ライブツィヒで活動し、M.レーガーに匹敵するほどの難易度の高い作品を多数作曲しました。楽譜には、オルガンのストップの詳細な指定が書き込まれ、彼の描く音の世界をオルガンで明確に表現しようとしていたことが窺えます。

J. S. バッハ: オルガン小曲集より

「おお人よ、汝の罪を嘆け」 BWV622

「キリストは死の縄目につながれたまいし」 BWV625

「聖なるキリストはよみがえりたまえり」 BWV628

「この日神の子は勝利をおさめたまう」 BWV630

ヴァイマル時代、1713年頃にまとめられたこの曲集は、教会暦の順序に従った46のオルガン編曲から成り、バッハ芸術の至宝と評されています。

この中から、キリストを十字架につけた人間の罪を嘆く受難節のコラールBWV622、イースターのために書かれた3曲、16分音符の動機が、キリストの墓から重い石が転がり去ることを象徴していると言われるBWV625、4度または5度跳躍する復活の音型がバスで奏されるBWV628、キリストのよみがえりの喜びをうたったBWV630を演奏します

H.ゲブハルト: 7つの新しいコラール前奏曲より「天の座にいます」

讚美歌21-322 「天の座にいます」 第1, 2, 3 節 皆様と一緒に歌いましょう

ゲブハルトは、キールのニコライ教会のオルガニスト、リューベックの音楽大学教授を務め、その活動は、国際的コンクールの審査員や音楽協会の評議員等、多岐に亘ります。

G. フィッシャー: 音楽的な戯れ - もしモーツァルトがコラール「心を外に向け、喜びを見つけなさい」を作曲したなら (1989)

ドイツ、ブルグシュタット生まれのフィッシャーは、ドレスデンの教会カントーラーを務めました。本曲の主題は、ドイツ・ルター派教会で春と夏、自然に感謝して歌われる、ドイツで最も親しまれているコラールです。この心温まるメロディがモーツァルトの「魔笛」風アレンジされていくという、ユニークな作品です。

M.レーガー: 12の小品集 op.59より「ベネディクトゥス」

～生誕150周年を記念して～

レーガーは数多くのオルガン曲を書いて、バッハ以来沈滞の感のあったオルガン音楽に新しい息吹をもたらしたドイツロマン派の最も重要な作曲家です。この曲は、天使の声のような美しい旋律で静かに始まり、典型的な彼の作曲技法ある半音階によって重厚な響きのフーガへと導かれた後、再び冒頭の旋律で静かに閉じられます。演奏時間約5分の小品ではありますが、美しく印象的な作品です。

O.メシアン: オルガンの書より「鳥の歌」

現代フランスを代表する巨匠・メシアンは、鳥の声の研究家としてもよく知られています。大好きな森や野原に一日中、身をおいて、鳥のさえずりを五線紙の上に再現しようとしたのです。その成果はオルガン曲ばかりでなく、ピアノやオーケストラのための曲にも結実しています。

この曲は、7曲から成る「オルガンの書」の第4曲、イースターのために書かれました。

まず、黒つぐみが歌いだし、続いて、こまどり、うたつぐみ(数羽の合唱)が次々に美しい声を披露します。夕方になると、夜のナイチンゲールが、待ちかねたようにさえずり始めます。やがてナイチンゲールの声が途絶えて、森に一日の終わりが訪れます。

鳥の声と鳥の声の間に、深遠なヒンドゥーのリズムが挿入されますが、これは森の情景を描写しているようです。これらが一つに溶け合って、大自然の「ある日の午後」が、見事に再現されるのです。

J.S.バッハ: シャコンヌ

(H.メセレール編曲 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 ニ短調 BWV1004より)
シャコンヌは、バッハの時代に入りますます複雑、長大になり、組曲やソナタの最終楽章として、そのクライマックスを担うまでに発展していきました。その頂点ともいえる作品が、このパルティータの最終楽章で、全曲の半分以上を占める大曲「シャコンヌ」です。この不朽の名作は、ブゾーニのピアノ編曲がよく知られていますが、優れた編曲は他にもたくさん生まれています。シューマンとメンデルスゾーンはピアノ伴奏を付け、ブラームスは左手のためのピアノ練習曲に、A.カセラはオーケストラのために編曲しています。

長年オルガンで弾きたいと願っていた私は、南仏マルセイユのサン・シャルル大聖堂のオルガニスト、メセレール(1838-1923)の編曲(1909)に出会うことができました。原曲の精神を損なうことなく、華麗にして重厚、オルガンの響きによく合うすばらしい編曲です。

バスの最初の4小節を変奏主題とすれば、257小節中に64回も反復されていることになります。しかし聴く者の心をとらえるのは、同じく繰り返される上声のメロディの美しさと、変奏と変奏が強く結び合わされて、息の長い音楽の流れが生じていることではないかと私は考えています。

主題が高度な演奏技巧によって次第に高揚していくニ短調(131小節)の第一部、地平の彼方からかすかな光が差し始めたような希望を感じさせるニ長調(76小節)の第二部、そして再び緊張感の高まりを見せるニ短調(49小節)の三部形式。変奏技法のあらゆる可能性を追求しようとするかのように多彩な変奏が間断なく続くのは驚くばかりで、まさに比類のない傑作と言えます。